



序

廃墟をはじめとする風化したイメージを目にしたときに感じ取る独特の臭気。

突如として生々しい存在感と伴に意識に流れ込んでくる痛烈な感覚は、私にとって逆らい難い膨大な力を持ち、またそれと同時に強力に思考を支配するものでもある。

本論文はこの感覚が生まれ来る元を探ることにより、自身の本質を理解し、造形に根ざす部分を描出していくことを目的としている。

第一章 記憶を巡る

本章では記憶と廃墟の二つをキーワードに、まず人間のもつ「イメージ」や「想像」について言葉を定義づけて考察を進める。我々は今現在の刺激がなくても、過去に経験した刺激を「表象」として再生することができる。表象は現在知覚されたものとは違い、その輪郭は漠然としており、明確さを欠く。内容が希薄で貧弱であり、安定性がないことから分解・消失しやすいものである。そこから人々の持つ廃墟への想いを、古代ローマから現代までの建築や芸術作品を例に読み解いていった。

我々人間が「無」を感じるのも廃墟の「失った部分」がそこに存在するのも、どちらもその相対する「存在」が確かなものでありと確信しているからであり、それを可能としているのも人間が優れた記憶の能力を持っているからに他ならない。思い

出や経験といった記憶が確かなものとしてある限り、そしてそこにありえたであろうものを期待できる場合に限ってのみ、そこに「無」を認識でき、その時間的距離との狭間でそれを実感できるのである。

第二章 人体のある表現

主に「人体」を取り上げ、その内面への廃墟化について論考した。江戸川乱歩『人でなしの恋』といった文学作品を足掛かりに、「人体」と「人形」との距離、またその境目について探り、またさらにハンス・ベルメール、ジョエル・ピーター・ウィトキンの作品への意識から、人体が暴力的に操作されることによって生まれる内側の空洞やアイデンティティーの喪失について廃墟と比較しながら考察した。

肉体の廃墟化について考えた場合、その多くの場合で皮膚への暴力がいとも簡単に行われている。肉体における輪郭を否定することによって、それらは「人間」という存在を超越しうる。このことは神の領域にまで聖性を高めると同時に、魂や精神性といった「人間」のもつ意識的な部分の表現をも可能にすると考えられる。キリスト教における個人が死を迎えることと、その復活までのプロセスを廃墟に置き換え、その輪郭である皮膚が侵され輪郭を失うことと、聖なるもの＝(形としての)人間ではないものへの再生への時間の流れを追った。

廃墟と人体が等価の感性で見られ、またそれらが同時に存在してきた事実があり、また人々は廃墟を人間の死から復活までのプロセスと見てきた。廃墟の持つ時間と人間が持つ時間は共通しているのだ。

第三章 研究報告書

「anagram」は単語や文章を、アルファベットやひらがなひと文字ひと文字になるまで分断させ、区切りをつけることにより、その文章自体の本質をより明確にしていく。それは全体から構成要素をひとつずつ取り上げ、再認識することで対象をより深く理解し、距離を近づけることである。つまりは、世の中のほとんど

のことは分節の集合体なのであり、それは視点を変え、人工的、もしくは自然的ななんらかの他者からの操作によってこれからさらに変容を遂げ、新しい存在となる可能性があると言える。

我々が例えば道具や機械、もしくは芸術作品としてなにかを生み出すという行為は、言いかえれば自分以外の外的な存在を自分という人間に付け加えることに等しい。自己という意識をその生み出す対象に向けて拡大しているとも言えよう。人間が自らの器官や能力を外化していくことによって、自己の範囲を広げているのである。土は干渉者を取り込んでいく。その体温を感じ、そこから水分を調節し、またその手触りさえも変えていく。私は制作を通して、こうした自己の拡張を行っているのだと言える。

また、積み重ねられる以前の紐状の粘土にはもちろん、裏も表も存在しない。しかし、制作過程が進むにつれて、それらは線の集合から、面へと姿を変え始める。この段階における積み上げるという行為は、かつて人々が石材や煉瓦を積み上げて建物を建造してきたことと同様の行動であり、いかにも建築的で、創造的な行為だと言わざるを得ない。

ここでは自作の制作過程を追いながら、素材との距離、また積み上げるという行為について考察し、陶である必然性を述べた。またこの章をもって研究報告書とする。

結

ここまでの考察を通して、自身が廃墟に惹かれ、知らず知らずのうちに魅了されてきた理由をまとめた。

「私と廃墟」、「私と人体」。この二者間だけでは今まで抱いてきた感覚を表現として描出しえなかった。しかしその間に「陶」という媒体を挟むことによって、意味を同じくした「廃墟」と「人体」から初めて独特の臭気を孕んだ「記憶」や「気配」が掬いだせたのである。陶を選択した理由をまとめ、これこそが唯一の表現方法であると結論付けた。



anagram H2000 × W2600 × D2400mm 陶 2009